

水
がはぐくんだ
松江の文化の
ヒストリー

松江市

序章

松江と水の関わり

松江といえば「水の都」「水郷」などと呼ばれるように、豊かな水に恵まれた町、というイメージが県内外に強く浸透しています。なぜかと問われれば、町の中心に隣接する宍道湖・大橋川の美しい景観や、町の中に張り巡らされた堀川がつくる城下町が、強く印象に残るからでしょう。しかし、松江をはぐくんできた「水」は、それだけではありません。私たちが親しんでいる様々の水を、大きく分けると次のようになります。

日本海（外海） 島根半島部の北側は日本海に面しており、海岸が海に沈んでできたリアス式海岸となっています。日本海は人々に海の幸をふんだんに提供しました。また変化に富んだ海岸線は舟が停泊しやすい良港となり、人々の交流と経済発展に大きく寄与しました。海が岩を削ってさまざまな奇岩や崖、海食洞を形成し、その景観は人々によって愛でられ、時により神話や伝承をはぐくみました。



島根町須々見海岸

中海・大橋川・宍道湖（内海） 松江の中央は、東西に中海・大橋川・宍道湖が貫通しています。これらは静かな内水面として、安全な交通路、流通路の役割を果たしました。また、時代によって湖の水質は、海水、汽水、淡水と変化しながら、内海の魚介藻類の宝庫となりました。特に宍道湖は松江を代表する景観として、市民の憩いの場や観光資源の中心の一つとなっています。



大橋川から宍道湖方向を望む

内海沿岸の小水面

この大きな内水面（宍道湖・中海）には、沿岸の水流により小湾の開口部に砂州が形成され、さらに小さな潟湖が形作られました。現在はほとんどが埋まっていますが、小さな水面が小地域ごとに、汽水や淡水の恵みをもたらし、また船の停泊地となって人や物の交流の基点となりました。約



寛永出雲国絵図に描かれた松江潟と佐太水海
(古代出雲歴史博物館提供)

1,300年前の『出雲国風土記』によると、現在の湖北平野の潟ノ内周辺は「佐太水海」と呼ばれ、大きな水面でした。黒田町の水田付近は「法吉陂」と呼ばれ、自然の池がありました。現在の西川津町周辺は湾となって水面が広がり、中世には末次砂州が伸びて「松江潟」を作りました。記録はありませんが、地形や土壌の観察から浜乃木町山居川周辺の低地も、かなり上流まで水面だったことが知られます。古代の中心地だった意宇川流域の平野も、少なくとも縄文時代までは潟湖だったと考えられます。



潟ノ内（浜佐田町）



意宇川（大草町）

中小河川 松江はバラエティに富んだ山地の地形を削って、多くの河川が日本海や内海に注いでいます。半島部の北山も、南部の中国山地南縁の山地も、分水嶺までの距離が短く標高もさほど高くはないので、大きな河川や急流は発達せず、意宇川や忌部川が比較的流域面積が広い程度です。それぞれの川には淡水産の魚介が棲み、内陸の村と外海・内海とを結ぶ交通路となりました。

堀割・水路 江戸時代はじめには、出雲国主となった堀尾氏が松江に入府し、松江城下町の建設を始めました。もともと水に恵まれた松江の地が、出雲国全体の交通・流通・経済の拠点としてふさわしいうえ、周囲の水域が城下町を守る自然の要害として機能することが重要でした。城を亀田山に定め、大橋川の南北に形成されていた末次、白潟の湊町を中核にして城下町を設計していきます。城は内堀で守られ、その周囲を外堀が回ります。堀は防御のためだけでなく、町中の交通路、つまり舟が行きかう幹線としても大きな働きをし、城下町の内外をつなぎました。



城下町の外堀（京橋川）

池泉・水路・水田 松江市の農村部には、小さな谷奥ごとに「つつみ」があります。谷の両側の山をつなぐように土手を築き、その上流に水を溜めるため池がほとんどです。お米を主食とした始めた弥生時代以降、稲を栽培するためには、水田に水を張るための「用水」が必要不可欠となりました。そのために田の上流に水を溜め、必要に応じて水路に放水し、水田に水を引きました。それぞれの水域には多様な生き物が棲み、時に人々の食糧となりました。



東生馬町の水田とコウノトリ

以上のように、松江は多種多様な水に囲まれ、そこに住む人々の生活を豊かにしてきました。このヒストリーでは、おおむね年代の流れに沿いながら、以下の5つのストーリーに分けてお話をしていきたいと思います。順番に読んでいただいても、興味のあるストーリーから読んでいただいてもいいかと思います。

STORY I | 豊かな水をもたらした地形の成り立ちと先史時代

STORY II | 日本海交流が発達する古代・中世

STORY III | 新たな水の町の発展 近世（江戸時代）

STORY IV | 近代化がもたらした水利用と水運の変化

STORY V | 水と災害